

『クライム・ソドム 4』 サンプル

目次

登場人物紹介

第一話

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話

第三話

最終話

登場人物

半藤太一郎 (ばんどう たいちろう)

27 歳。村の玩具。

村ぐるみのセクハラを受けている。

平常時 4.3 センチ、勃起時 7.3 センチの皮冠おちんちん。

笹貫 (ささぬき)

32 歳。

太一郎の管理人。

後藤 (ごとう)

57 歳。太一郎が住む村の村長。

太一郎への村ぐるみのセクハラを先導している。

坂島金三 (さかしま かねぞう)

年齢不詳。

かつてDKであった太一郎を辱めた銀行強盗。

出所後、目的を持って失意の底にある太一郎に近づく。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係で

す。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

第一話

半藤太一郎は男たちに押さえつけられていた。

「止めてくれ！」

太一郎は男に襲われる恐ろしさから叫んだ。

「もっと欲しいだろ？」

「犯されたいって顔をしているぜ」

「お前が俺たちを誘っているんだよ」

だが、男たちは太一郎を嘲笑すると、太一郎から服をはぎ取っていく。

ビリビリと乱暴に服を引き裂かれ、太一郎の屈強な肉体が露わになる。

長年の剣道による鍛錬で鍛え上げられた胸板の厚みや引き締まった腹筋に男たちが手を這わせる。

男からの性的な接触に太一郎は嫌悪感を覚えた。

太一郎は男だ。

男なのだ。

それなのに、男たちに群がられ、襲われている現状が恐ろしかったのだ。

「へへへへ、いい身体をしているじゃないか」

「こんなに男らしい身体をしているのに、男を刺そうなんて悪い奴だよな」

「ケツが疼いて仕方がないんだろ」

男たちが太一郎を襲いながら下品な笑みを浮かべている。

「止める！ 俺は男なんだぞ！」

太一郎は必死に抵抗するが、いくら剣道で鍛えているとはいえ、屈強な男たち相手に一人で抵抗を続けるのは無理がある。

太一郎は手足を押さえつけられ、身動きを取れなくされてしまう。

「いいケツをしているじゃねえか」

男の一人が赤のボクサーパンツに覆われた太一郎の尻を撫で回す。

何度も何度も男に凌辱された経験のある太一郎は男も犯されてしまうというおぞましい現実を知っている。

太一郎を襲う男たちがチンポをケツにぶち込むために太一郎を押さえ込んでいることも分かっている。

だが、理解と納得は別の問題だ。

太一郎は己が男の性欲の餌食となることを認めていない。

男に消費される己に納得などしていない。

「止めろ！ 頼むから止めてくれ！」

だから太一郎は必死に男たちに訴える。

犯さないでくれと懇願する。

「こんなにムチムチしたケツで誘っておいて、それはないだろう？」

「お前は俺たちに犯されるために生まれたんだよ」

「お前だって、俺たちに犯されて気持ちよくなりたいだろ？」

だが、男たちは太一郎の懇願に耳を貸さない。

男の一人が太一郎の赤のボクサーパンツに鉋を入れた。

じょきじょきと音を立ててボクサーパンツが切り裂かれていくことに、太一郎は恐怖を覚えた。

獣欲に狂った男たちに己の下腹部や臀部を見せることが、飢えた獣の群れに生肉を投げ込むようなものと分かっているからだ。

「止めてくれ！ 助けてくれ！」

太一郎は必死に男たちに赦しを乞う。

嫌だったのだ。

男であるにもかかわらず、男たちの餌食にされてアブノーマルな快楽を受容してしまう己が厭わしくて仕方がなかったのだ。

だから太一郎は涙まで流して男たちに訴える。

男たちに人の心があるのならば、太一郎の涙ながらの懇願に心を動かされ、レイプをすることに罪悪感を覚えてだろう。

けれど、男たちは太一郎を解放しようとはしない。

過去に太一郎を辱めた男たちのように、情け容赦なく太一郎から最後の砦である赤のボクサーパンツをはぎ取っていく。

「うわああああああ」

太一郎は恐ろしさから叫んだ。

その表情は貞操帯を破られ、野蛮な敵兵に犯される直前の貞淑な貴婦人のように絶望と恥辱に歪んでいた。

ぼろん……

赤のボクサーパンツが引きはがされ、太一郎の巨根がぶらりと零れ落ちた。

太一郎のチンポは常人よりも長く、亀頭がぷっくりと膨れた土筆のようなシルエットであった。

金玉も大きく、精力に溢れていることが見て取れた。

金玉や下腹部の毛は濃く、男性ホルモンの強さがチン毛などの黒さから分かった。

「男らしいじゃないか、半藤太一郎」

「こんなに立派なチンポをぶら下げているのに、ケツが疼くなんて情けない奴だな」

「お前さあ、全世界の男に謝罪しろよ」

男たちが太一郎の巨根を物のように扱い、愚弄する。

太一郎にとって巨根は男らしさの象徴だ。

何度も男に凌辱された太一郎にとって、チンポの大きさは己の男らしさを確認できる唯一の要素であった。

その要素を笑われ、太一郎は屈辱に震えた。

男たちが邪悪な笑みを浮かべて、太一郎の全身に手を這わせる。

太一郎にとって性的対象ではない男からの性的な接触に太一郎は身体を強張らせる。

「おいおい、身体を硬くしてどうしたんだい、太一郎ちゃん」

「俺たちに愛撫されてドキドキしているのかい？」

「初めてでもないだろうに、処女みたいな反応をするよな」

男たちが太一郎の全身を撫で回しながらにやにやと笑う。

太一郎は男たちの手におぞましさを覚え、鳥肌を立てる。

「止めてくれよ、俺は男なんだ。」

お前らだって、女の方がいいだろ、なあ、助けてくれよ」

太一郎は男たちに懇願を繰り返す。

だが、男たちは顔を見合わせて笑う。

「何を言っているんだよ、太一郎ちゃん」

「お前、自分が男だと思ってたのかよ、笑える」

「男を誘っておいて、俺は男だなんて、白々しい嘘をつくなよ」

男たちが邪悪な笑みを浮かべて声を合わせる。

「「お前が男を狂わせるから、何度も何度も凌辱されるんだよ」」

「違う！」

太一郎は泣きながら叫んだ。

太一郎は過去の凌辱を思い出した。

最初の凌辱は太一郎が高校生の時であった。

銀行強盗に弄ばれた。

銀行強盗は太一郎に全裸を強要し、恥ずかしい言葉を言わせ、人質たちに太一郎を辱めさせた。

「思い出しただろ、半藤太一郎」

男たちの顔があ那时的人質の顔になる。

「お前は、俺たちに犯されて悦んだだろ？」

童貞チンポからザーメンを押し出されてアへ顔を晒したじゃないか」

「お前が凌辱されたい顔をしていたから、わざわざ狙われたんだよ」

「男を誘う淫売が。」

お前のせいで俺たちはお前を犯す羽目になったんだよ」

「止めてくれ！」

太一郎は涙を流しながら叫んだ。

あの凌辱を受けるまで、太一郎は己を普通の男だと信じていたのだ。

オナニーさえ奇怪なスタイルになってしまう変態に成り下がる未来など思いもしなかったのだ。

あの凌辱のあと、太一郎は長年にわたってオナニーすらままならないほど、快樂に結びついたおぞましさに苦しめられたのだ。

それを、太一郎が望んだかのように笑われる筋合いはないのだ。

ないはずなのだ。

「大学生になっても、お前の変態ぶりは変わらなかったな」

男たちの顔が、大学生の時に太一郎を凌辱した宝石商とその護衛の外国人の顔になる。

「俺たちにケツを犯してもらえて嬉しかったら？」

「お前はチンポを勃起させて善がり狂っていたものな」

「違う！」

太一郎は絶叫した。

大学生の時、太一郎は確かに凌辱された。

だが、あれは所属していた剣道部の名誉を守るためであり、太一郎が望んで男にケツを差し出したわけではないのだ。

「おいおい、嘘を言ってはいけないな」

宝石商の顔をした男が太一郎の逞しい尻を叩いた。

「お前は、俺たちに凌辱されて愉しんだら？」

「俺たちに犯されることを期待していたんだ？」

男たちが太一郎に邪悪な笑みを向ける。

「お前は、半藤太一郎は男であると主張をするが」

「ケツで感じるメスを男と呼んでいいのかな」

「その上、チンポで善がり狂ってザーメンまで漏らしたしな」

「それは……」

太一郎は言葉に詰まった。

過去の凌辱で太一郎がトコロテン射精をしたことは事実だ。

実直な性格の太一郎は、たとえ屈辱的な過去であろうと嘘をつくことはできなかった。

「だったら、半藤部長のケツに聞いてみましょうよ」

「半藤部長は雄かメスカ、はっきりさせましょう」

「まあ、結果は分かり切っていますがね」

太一郎を嘲笑う男たちの顔が剣道部員たちの顔に変わった。

そう、宝石商たちに凌辱された太一郎に欲情して、太一郎を輪姦した剣道部員たちの顔に変わったのだ。

「止めろ！」

太一郎は叫んだ。

けれど、男たちに押さえ込まれた太一郎に抵抗ができるはずもない。

男の一人が太一郎のケツに指を三本突っ込んだ。

「いきなり、指三本でもあっさり飲み込むなんて、半藤部長のケツはマ○コですよ」

「男のケツなら、指一本でも痛がるはずですよ」

「本当は指よりチンポが欲しいんでしょう？」

剣道部員たちの顔をした男たちが太一郎を愚弄する。

太一郎はアナルに押し込まれた指の感触におぞましさを覚えた。

だが、凌辱に傷ついた太一郎の心にとって、快樂とはおぞましきであり、おぞましきは快樂なのだ。

だから、太一郎はアナルに押し入れられた指のおぞましさに、雄膺が疼きだしてしまう。

雄膺を蹂躪される悦び、前立腺を刺激される悦び、強引に身体を割り開かれ望まぬ快樂に沈められる悦び……

凌辱の悦びが太一郎の身体に情欲の炎を灯す。

太一郎の逞しい身体がほんのりと火照り、汗がにじみ出る。

汗は太一郎の屈強な肉体に淫靡な艶を添えていく。

「はあ……はあ……くう……」

太一郎の口から浅ましい喘ぎ声が溢れ出る。

溺れては駄目だと太一郎の心の一部が叫ぶが、太一郎の肉体と心の大部分は雄膺の快樂に溺れていく。

かつての凌辱で快樂に心が折られたように、今回もまた快樂に溺れていく。

太一郎の股間でくたっと萎れていた巨根チンポが徐々に勃起していく。

陰茎が太く長くなり、亀頭の半分ほどを覆っていた包皮が雁首に後退する。

亀頭がパンパンに膨れ上がり、太一郎のチンポの雄々しさを強調する。

「そら、見ろよ、半藤部長の股間を」

「触ってもいないのにチンポが勃起しているぜ」

「半藤部長、教えてくださいよ。」

どうして触ってもいないのにチンポがビンビンになっているんですか？」

男たちが勃起した太一郎のチンポを指差しながら笑う。

太一郎は快樂と屈辱に顔を歪ませ、歯を食いしばった。

言えるわけがない。

男にケツをいじられてチンポがビンビンになったなどと言えるわけがない。

太一郎は己を男なのだと信じている。

男なのだと感じていたいのだ。

そんな太一郎にとって、ケツで感じていることを口にすることは己への裏切りなのだ。

「そうやって、だんまり決め込んで挑発しているんですか？」

「もっと酷く仕置きされたいからわざと反抗的な態度を取るんですよね」

「俺たち、半藤部長のことよく分かってますよ」

男たちが一斉に唱和した。

「「半藤太一郎はケツの快樂がないと生きていけない肉オナホなんだってね」」

「違う！」

男たちの嘲笑に太一郎は首を振った。

太一郎は男なのだ。

肉オナホなどではないのだ。

「へええ、そんな口を利いていいのかな」

男たちの顔が再び変化した。

男としての太一郎に決定的な傷を残した誘拐犯たちの顔だ。

「街角で魔羅ビームって叫ぶような変態が男だなんて認められるわけないだろ？」

「その上、アナニー大好きな男の出来損ないだもんな」

誘拐犯たちが太一郎を嘲笑する。

「それは、お前らが強要したんじゃないか！」

太一郎は男たちに反論する。

「そうだったけ？」

男がにやにやと笑った。

「俺たちは、オナニーしろ、とは言ったけどアナニーをしろ、なんて言ってないぞ」

「命令してもいないのにお前が勝手にアナニーをしたんじゃないか、変態」

男たちの言葉に太一郎は怒りと屈辱で頭が真っ白になる。

太一郎はしたくてアナニーをしているのではない。

過去に受けた凌辱が元で、アナルを弄らずにはいられなくなっただけなのだ。

それを、男たちは太一郎がアナニーを求めているかのような言い方をする。

「じゃあ、思い出してみろよ」

男の一人が太一郎に囁いた。

「俺たちが警察官に逮捕されたときを思い出してみろよ」

「止めろ！」

男の囁きに太一郎は目を閉じ、大声で叫んだ。

「俺たちから解放された半藤太一郎は何をしたのか、思い出してみろよ」

「止めろ！」

太一郎は必死に男たちの囁きを否定する。

「真実の己から目を背けることは、男らしいと言えるのかな」

だが、男たちの囁きは毒のように太一郎の心に染み入る。

太一郎が必死に忘れようとしている記憶をこじ開けようとする。

「さあさあ、思い出せよ、半藤太一郎。」

本当のお前の姿をさあ！」

「嫌だ！」

太一郎は絶叫した。

あのことだけは思い出したくない。

思い出したくないのだ。

「俺たちから解放された半藤太一郎は何をしたのか」

「それは、アナニーの続きでした」

「アナルで絶頂するために、半藤太一郎は自分の欲に従って己のアナルにディルドを突っ込んだ」

「本当に忘れたのかな？」

「本当に忘れたのかな？」

「本当に忘れたのかな？」

男たちが繰り返し繰り返し、太一郎に問いかける。

「止めてくれよ……」

太一郎はすすり泣き始めた。

思い返したくなかった。

思い返したくなかったのだ。

太一郎が自分の欲でアナルにディルドを突っ込んで絶頂した時のことなど、思い出したくなかったのだ。

その記憶は、太一郎のアイデンティティを崩すものだ。

無理やり犯されて仕方なく感じてしまったのだという太一郎の逃げ道を完膚なきまでに潰してしまう悪夢なのだ。

そんな記憶、忘れてしまいたかったのだ。

「でも、身体は覚えている」

「身体は求めている」

「お前の雄膣は疼いている」

男たちが囁き続ける。

「お前の雄膣が疼いているぞ、半藤太一郎」

「指じゃ足りない疼いているぞ」

「チンポが欲しいと、俺の指に縋りついているぞ」

「嫌だあああああ！」

太一郎はすすり泣き始めた。

太一郎は三度も凌辱され、そのいずれもで快楽を得たというのに、己を男だと思いたかったのだ。

けれど、身体は太一郎の願いを裏切る。

巨根チンポが痛いほどに勃起し、我慢汁を流し始める。

そして、男たちが指摘する通り、太一郎の雄膣は凌辱を、チンポを求めて疼いているのだ。

太一郎は下腹部の疼きに耐えかねて、泣きながら喘ぎ声を出す。

悲しみと屈辱と絶望とで心が張り裂けそうになり、言葉を紡ぐ余裕すらない。

「俺たちは紳士だからさ」

「望み通りにしてやるよ」

「チンポ、欲しいんだよな」

男たちが太一郎のアナルから指を引き抜くと、太一郎をちんぐり返しの姿勢に固定する。

太一郎のアナルに男の勃起チンポが押し付けられる。

指でほぐされていた太一郎のアナルが、待ち望んでいたチンポを易々と受け入れる。

雄膣が満たされる快楽に太一郎は咽び泣いた。

雄膣の快楽に感極まって泣いていた。

雄膣で快楽を得る己への情けなさで泣いていた。

相反する感情に苦しみながら、太一郎は泣き続けた。

男が太一郎を性の掘削で凌辱していく。

チンポで奥を突かれるたび、太一郎の勃起巨根がビクンビクンと震えて、我慢汁をぬとぬとと撒き散らす。

「ああ……うあああ……いやだあ……いやだあ……」

太一郎は喘ぎながら泣き続ける。

性の掘削で揺さぶられる太一郎の屈強な肉体は瀕死のミミズのように無様であった。

そんな中で、太一郎の勃起巨根だけが威容を誇っている。

太一郎が雄膺で快楽を得ていることを何よりも如実に証明しているのだ。

「お前の中、最高だよ、半藤太一郎」

「男をその気にさせる最高のマ○コだよ」

「チンポに縫り付く天性の情夫だよ、お前は」

男たちが善がり狂う太一郎を嘲笑う。

けれど、雄膺の快楽に狂う太一郎には、男たちの嘲りの声も届かない。

ただただ、雄膺の快楽と屈辱に悶え、泣き、善がることしかできない。

やがて、太一郎の下腹部から熱いうねりが沸き立ちはじめた。

「あああ……いやだあ……イきたくないいい……」

太一郎は善がりながら現状を否定する。

けれど、太一郎の勃起チンポはこの状況を肯定している。

ぶるんぶると震えながら、我慢汁を流し、太一郎が快楽に溺れていることを高らかに示している。

太一郎の下腹部から情欲の熱が競り上がる。

太一郎はその予感に悦び、嘆き、苦しみ、求め……

「ひいいい！」

太一郎は布団の上で身を起こし、叫んだ。

顔は汗に濡れて髪の毛が額に張り付いている。

太一郎は呼吸を繰り返しながら現実を確認する。

暗がり太一郎の屈辱の記憶を刺激するという理由から、寝ている間も付けている電灯が狭い部屋を照らしている。

板敷の部屋から続く壁際には小さな冷蔵庫とコンロがあり、コンロの上には鍋と薬缶が乗せられている。

太一郎の布団の側には壁に立てかけられたちゃぶ台がある。

ちゃぶ台と布団を両立させることもできないほどに狭い部屋。

かつては剣道の代表選手として将来を嘱望されていた太一郎の、今の居住空間がみすぼらしいこの部屋なのだ。

太一郎は下腹部のぬめりに顔をしかめた。

薄い掛布団を捲ると、太一郎の白ブリーフにザーメンの染みができ、男の臭いが漂う。

太一郎は泣きたい思いを堪えながら白ブリーフのゴムを掴み、股間を覗き込んだ。

夢の中では巨根のままであったが、現実の太一郎の皮冠短小おちんちんが親指とどっこいどっこいの長さの情けない勃起姿を晒している。

金玉が大きい分、無毛の皮冠短小おちんちんの無様さが際立っている。

皮冠の間から溢れたザーメンが白ブリーフの内側にべっとりとこびりついている。

太一郎は立ち上がると、部屋の隅にある棚の前に移動した。

棚の上にはティッシュが乗っている。

太一郎は白ブリーフを脱ぐと、皮冠短小おちんちんについたザーメンをティッシュで拭き取る。

金玉の大きさに相応しい量のザーメンで汚れているため、太一郎は何度もティッシュを取って丁寧に拭き取る。

それから皮冠短小おちんちんの包皮を剥き、ピンク色の亀頭を露出させると根元から親指で押して尿道に残ったザーメンを絞り出し、ティッシュで拭く。

太一郎はため息をついた。

かつてはザーメンを絞り出すためにぐぐいっと押し上げなければならなかった陰茎の長さも今はみすぼらしい短小になっていることをこの動作の度に思い知らされるからだ。

ザーメンを拭いたティッシュを丸めてごみ箱に捨てると、太一郎は脱いだ白ブリーフを拾った。

白ブリーフの前合わせには、ザーメンがべっとりとかびりついている。

過去に巻き込まれた犯罪によって巨根を失ってしまった太一郎にとって、ザーメンの量だけがかつての巨根を思い起こさせるものだが、夢精となると話は別だ。

処理が面倒だし、見ていた悪夢もおぞましいものだから目が覚めて白ブリーフが濡れていることを確認するたびに、嫌な気分になる。

太一郎はティッシュを取ると、白ブリーフに付着したザーメンを拭き始めた。

布地に染み込んでいるため、完全に取り去ることはできないが、拭き取れる分だけは拭き取れた。

太一郎はその白ブリーフをじっと見つめた。

その光景を普通の男が見たのなら、夢精した下着など洗濯機に入れてしまえばよいのに、と考えただろう。

だが、今の太一郎の境遇は普通とは言えなかった。

「また夢精したのか、へんたいちろう」

太一郎の部屋のドアが乱暴に開かれ、ひげ面の男が部屋に入ってきた。

「笹貫さま……」

太一郎は慌てて頭を下げた。

このひげ面の男、笹貫は今の太一郎の管理人なのだ。

管理人とは文字通りの意味で、太一郎は笹貫に着用する下着などを管理されているのだ。だからこそ、太一郎は部屋に鍵をかけてプライベートを守ることも許されない。

管理人である笹貫の機嫌を損ねるわけにはいかない太一郎は、丸出しの皮冠短小おちんちんを隠すこともなく、頭を下げた。

「答えろ、へんたいちろう。

お前はまた夢精をしたのか」

笹貫の詰問に太一郎は顔を赤くした。

太一郎にとって夢精とは、生理現象ではなく、過去の恥辱に現れであり、太一郎が過去の凌辱に囚われていることを示すものであった。

太一郎は、過去の凌辱のことは笹貫たちには秘密にしている。

話せるわけがない。

男でありながら過去に三度も凌辱されたことを自分から口にできるはずがないし、もしも知られてしまったらそのことを理由にもっと苛烈な辱めを与えられるだろう。

三度目の凌辱の後に、剣道選手としての将来も、愛する人も、男としての自尊心の象徴である巨根も失った太一郎ではあるが、それでもなお、自分の手で地獄の底を掘り下げのような真似はしたくなかった。

「しました」

だから、太一郎は今回も笹貫の問いに答えるだけに留めた。

「そうかそうか、どんな夢を見たんだ」

笹貫の問いかけに太一郎は何度も繰り返してきいた嘘を用意した。

「彼女とのセックスの夢です」

太一郎は童貞だ。

彼女とはセックスをしたことなどない。

最初で最後となった愛しい人とはセックスをする前に別れたのだ。

だが、太一郎はそんなことは告白しない。

勿論、太一郎は永遠に秘密を隠し通せるとは思っていない。

今もなお、太一郎の恥辱動画はネットで拡散し続けている。

いずれ、この村の人間が、笹貫がそれを見つけるだろう。

だが、それまでは太一郎は凌辱の事実を、雄膺で感じてしまう己の秘密を隠したかったのだ。

「ははははは、そんな皮冠短小おちんちんでセックスなんかできるわけないからな。

ありもしない夢を見て無駄打ちザーメンをどぴゅどぴゅするぐらいしか能がないからな、へんたいちろうは」

「その通りです」

太一郎は屈辱を堪えて笹貫に追従をした。

下手に逆らったり、不服などの感情を見せれば苛烈な躰を受けることになることが分かっていたからだ。

笹貫がにっこりと笑った。

太一郎は不味い、と思った。

笹貫がにっこりと笑うときは機嫌が悪い時だ。

笹貫は笑顔を作ることで感情をコントロールしていることを、太一郎は何度も思い知らされてきた。

だが、何が不味かったのだろうか。

太一郎は身を強張らせながら考えた。

笹貫の言葉にきちんと追従をしたし、感情を表に出さないようにもしてきた。

今回こそは、笹貫の機嫌を損ねるような問題は起こしていないはずだ。

「へんたいちろう、お前、男だろ？」

笹貫が太一郎に一步近づいた。

「皮冠短小おちんちんをくつつけた出来損ないとはいえ、でかい金玉ぶら下げた男の癖に、ぺこぺこしていて恥ずかしくないのか？」

笹貫の言葉に太一郎は動揺した。

笹貫は、いや、この村の人間は太一郎をまともな男として扱ったことはない。
太一郎を、皮冠短小おちんちんをぶら下げた男の失敗作として嘲笑し、玩弄し、辱めてきた。

その一人である笹貫にこのような言葉を言われる筋合いはないのだ。
「端っことはいえ、男の癖に情けない態度を取っているとなあ、男の品位が下がるんだよ。
分かるか。

お前一人のせいで、この村の男が安く見られるんだよ」

「申し訳ありません」

太一郎は頭を下げた。

他にどんな言動をすればいいのか、分からなかったのだ。

「だから、そのみっともない追従を止めろって言っているんだよ」

笹貫が笑顔を浮かべたまま首を振った。

不味い、と太一郎は思った。

笹貫の機嫌がどんどん悪くなっている。

けれど、太一郎は何が正解なのか分からない。

過去の笹貫は、太一郎が追従をしなかったり、恥じらって口籠もったりすると躰と称して辱めてきた。

だから、太一郎は笹貫の機嫌を損ねないように追従に徹してきたのだが、今回のような言いがかりは予想外であった。

正直なところ、どのように対応をすることが正解なのか分からない。

正直に言って理不尽だと思った。

太一郎は笹貫の態度を理不尽だと感じたが、そのことへの怒りは覚えなかった。

過去の三度の凌辱はいずれも理不尽な理由によるものであった。

理不尽な凌辱によって人生を狂わされた太一郎には、理不尽に対して怒りを覚えるだけの気力が残っていないのだ。

「その辛気臭い顔も、気に入らないんだよなあ」

笹貫が舌打ちをする。

「お前さあ、今の立場分かってるのかよ。

家族にも見捨てられた皮冠短小おちんちん野郎を受け入れてやったのがこの村の後藤村長で、この俺は後藤村長から直々にお前の管理を依頼されているんだぞ」

笹貫の言葉は事実であった。

太一郎は家族にも見捨てられた。

ネット上に流出した太一郎の動画に、太一郎の家族は失望したのだ。

自分からディルドをケツにぶち込むような変態と血がつながっていると思うとおぞましい、と罵倒されたこともある。

そして、三度目の凌辱とその顛末にまつわる様々な喪失のショックで引きこもっていた太一郎は追い出される形で、遠縁であるこの村の後藤村長に預けられたのだ。

だが、後藤村長もまた、太一郎を凌辱した男たちと同じ人種であった。

寄る辺のない太一郎を辱めることに執心しており、笹貫という管理人を当てがったのだ。

今の太一郎は助けを呼ぶこともできない。

この村の人間たちは皆、太一郎をまともな人間としては扱わないし、この村を出たとしても太一郎には生計を立てる手段がない。

この村で、辱められながら飼われ続けるしかないのだ。

「申し訳ありません」

太一郎は笹貫に謝罪をした。

「まったく、謝れば俺の機嫌を直せると思っているのか。

馬鹿だよなあ、へんたいちろうは」

笹貫が壁を指差した。

「躡け直してやるから、壁に手をつけて尻を向けろ」

「分かりました」

太一郎は頷いて、壁に手をつけて尻を笹貫に突き出した。

太一郎の逞しい尻肉と太ももの間の空間に大きな金玉がだらりとぶら下がっている。

尻を出せということはスパンキングだろうか、と太一郎は考えた。

笹貫は太一郎を躡けると称して、好んでスパンキングをする。

女性の前であろうと、子どもの前であろうと容赦なく太一郎に尻を出させ、尻が真っ赤になってひりひりと痛むまで叩き続けるのだ。

太一郎は覚悟を決めた。

尻を叩かれる程度で済むのならば安いものだと考えた。

笹貫の手が太一郎の尻に伸びる。

ぎゅううううううううううううう！

「うぎゃあああああああああああああ！」

太一郎は絶叫した。

尻に伸びた笹貫の手が太一郎に残された最後の男らしさである大きな金玉を思いっきり握って絞り上げたのだ。

笹貫の手には太い血管が浮かんでおり、太一郎の金玉に込めた力の大きさを物語っている。

「あああああああああああああああああああああ！」

太一郎は壁についた手に力を入れ、必死に鈍痛を堪える。

強く力を入れているので、太一郎の指先が白くなる。

太一郎の全身から脂汗が流れ、太一郎の逞しい尻も汗に濡れててらてらと輝く。

ごりゅっ！ ごりゅっ！ ごりゅっ！

笹貫の手がリズミカルに太一郎の金玉を握り、絞り上げる。

「ぎよべえ！ ぐびい！ ぎべえ！」

太一郎は無様な悲鳴を上げ続ける。

「金玉だけは男らしいよなあ、へんたいちろうは。

まあ、だからこそ、こうして男らしい目に遭っているわけだがな」

笹貫が邪悪な笑みを浮かべている。

「お、おゆるじをおおおお！」

太一郎は必死に笹貫に訴える。

「何言っているか分からねーよ、へんたいちろう」

笹貫が必死に赦しを求める太一郎を嘲笑う。

「俺は人間だから変態の言葉は分からないんだよ」

笹貫が太一郎の大きな金玉に親指を捻じ込んだ。

「ごぼええええええええええ！」

太一郎は背を仰け反らせて絶叫した。

金玉に穴が空くのではないかと不安になるほどの強さで親指を捻じ込まれたのだ。

太一郎の全身は金玉の鈍痛に悶絶し、震えている。

太一郎の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃに濡れている。

「ああ、可哀そうになあ」

笹貫が嗤った。

「こんなところだけまだ男だから、こうして苦痛に悶える羽目になるんだよ。

どうせ男としてのへんたいちろうの価値なんてないんだし、去勢してやろうか？

そうすれば、もう金玉を責められて悶絶しなくて済むし、夢精もしなくて済むぞ」

「お、おゆるじぐださい！」

太一郎は涙と鼻水の混じった声で懇願した。

金玉は、家族も恋人も剣道も巨根も失った太一郎にとって、最後の男らしさだ。

その男らしさを失ったら、と思うと太一郎は途方もない恐ろしさに震えてしまう。

ギチギチと太一郎の金玉が軋む。

笹貫の親指がミシミシと太一郎の金玉に沈んでいく。

それに伴って太一郎の金玉が変形する。

「お、おごおおお！ おぎゃあああああ！」

太一郎は無様な悲鳴を上げる。

太一郎の全身を流れる脂汗が量を増していく。

太一郎の尻が脂汗でてらてらと濡れ輝いている。

太一郎の足元には脂汗の染みが広がっている。

「ははははは、情けない声だなあ。

男のクズに相応しいゴミのような声じゃないか」

笹貫が愉しそうに笑う。

笹貫が両手で太一郎の金玉を包み込んだ。

そして、縄を結うように両手で金玉を擦り合わせ始めた。

「おぎょおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

太一郎は全身を痙攣させた。

金玉を粘土のように捏ね回されて悶絶しない男がいるだろうか。

太一郎は男であるが故の苦痛に全身を震わせている。

「なあ、このまま去勢してやろうか。

その方がお前も諦めがつくだろう？」

「おゆるじをおおおお！」

太一郎は必死に笹貫に赦しを乞う。

太一郎は男のままでいたかった。

男のシンボルである巨根を失い、金玉しか男らしさを残していないとはいえ、太一郎は己

が男であることに縋りたかったのだ。

だから去勢などされたくなかったのだ。

「そんなにも男のままでいたいのか、へんたいちろう」

笹貫が太一郎の金玉を押しつぶしながら問いかける。

「おどごでいはいでずうううううう」

太一郎は必死に笹貫に訴えた。

「仕方ないなあ」

笹貫が太一郎の金玉を手から放した。

太一郎は壁に縋りつきながらずるずるとへたり込む。

ひゅーひゅーと荒い呼吸を繰り返しながら太一郎は金玉の痛みを緩和しようとする。

「男を止めたくなくなったらいつでも言えよ。」

まあ、今でも男のミソッカス程度だがな」

笹貫の嘲笑に太一郎は何も言えなかった。

されるがままなのが、今の太一郎の現実なのだ。

奥付

『クライム・ソドム 4』より、第一話

初出：2021年12月31日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep